中学校の部　最優秀賞

輝ける絆

結城市立結城東（ゆうきひがし）中学校　一年　根本　隼之介

十二年前、僕がこの世に生まれてきた瞬間、細い絆がつながり始め、今もその絆は、太く長く僕をつないでくれている。

僕は、七七〇グラムで生まれてきた。冗談のようだが、大人の手のひらに乗ってしまうような赤ちゃんだ。

その時、僕も母も危険な状態で、赤ちゃんが生まれたというのに、「おめでとう」という雰囲気は全くなかったそうだ。そのうえ僕は、仮死状態、当然、自発呼吸は出来ず、二ヶ月間、人工呼吸器をつけていた。僕の体は管だらけ。家に帰れたのは、四ヶ月後だ。

そのことが理解できる歳になった時、

「えー。死んで生まれてきたの！」

と実はびっくりした。正直、自分のことなのにピンとこなかった。

今は、薬を飲んでいるものの、普通に生活できている。家族は皆、奇跡だと言う。そんな環境だったので、生まれた時から、様々な人の手に導かれ、見守られて、今ここに僕はいる。

母に聞いたところ、小さい頃、一度だけ聞いたことがあるそうだ。信じられないが、僕から聞かれたのは一度だけだという。

「何故、僕だけ毎日薬をのむの！」

「何故、僕だけ、毎月、血をとるの？お友達は誰も、そんなことはしてないって」と…。

小学校に入学し、自分が少しだけ、皆と違うことに気づいたのだろう。その時、母は、とても辛かったと思う。でも母は、僕の体のことについて、小さな頃から、かくしたり、ごまかしたりすることなく、きちんと説明してくれた。手術のことも、様々な症状のことも…。

そして、そういう時は、必ずこう言うのだ。

「あなたの命は、たくさんの人の手で助けられた。そして、今なお、たくさんの人の手で支えられている」と。

わかっていたけれど、当時は、やせていることがいやで、がりがりの体も恥ずかしく、半袖の服を着るのも、水着を着るのもいやだった。今はそんなこはないけれど…。

小学六年の時の検査で、やっぱり大人になるまで、薬を継続することに決まった。もしかして、もう薬はいらないのかな？と、期待する気持ちがあったけれど、僕は今まで通りの自分を受け入れるしかなかった。

出生当時、お世話になった看護師さんの一人は遠い病院へ行ってしまったが、毎年年賀状のやりとりをしている。

そして、毎年、僕から届く年賀状が、楽しみだと言ってくれる。

写真の中で、年々、大きくなっていく僕を見ていると、遠くから我が子の成長を見守るもうひとりの母のような気持ちになると…。

なんて、僕は幸せなのだろう。

あそこにも、ここにも僕を見守ってくれる温かい瞳があるのだ。

もしかしたら、僕は病気にならなければ、そんな素晴らしいことに気がつかなかったかもしれない、当たり前のこととして、何の感謝もしなかったかもしれない。

僕は最近、ある決断をした。今まで激しい運動などしたことがない。でも、どうしても運動がしたくて、病院の先生と相談して、文化部から運動部へ転部した。

母をはじめ家族全員が、僕の体を心配しているのが、ひしひしと伝わってくる。何しろ、小学三年生の弟までもが、心配しているのだから…。

でも、大丈夫。意外にも僕は頑張っているよ。

学校の先生にも、友達にも、そして家族からも、僕は大きな力をもらっている。

根を張る木に広がる枝のように、僕との絆が広がっている。そうやって僕は、今まで、守られてきたのだ。

僕はその絆を、更に太く、いくつもいくつもつないでいこう。

将来は、医療に携わる仕事がしたい。夢に近づくための階段は長く遠い。

でも、未完成で、未熟な僕だけれど、感謝の気持ちを忘れず、一歩一歩…、そう一歩一歩、絆をにぎりしめ進んでいきたい。